

芥川龍之介「藪の中」論 —— 繁体字文化圏からの照射 ——

Ryunosuke Akutagawa's "Yabunonaka": From the Point of View of the "Traditional Chinese World"

黄 郁婷

Yuting HUANG

一

芥川龍之介の短編「藪の中」(「新潮」1922・1)は『今昔物語集』に取材した作品である。高名な黒澤明の映画「羅生門」は、そのストーリーをこの「藪の中」に依拠している。しかしタイトルは「羅生門」である。いうまでもなく、「羅生門」(「帝国文学」1915・11)は芥川の代表的な短編である。なぜ映画において「羅生門」と「藪の中」が重ね合わせられたのかという点、ともに『今昔物語集』から題材をとった「王朝物」であり、作中で犯罪が行われるという類似性があげられる。もともと『今昔物語集』本朝世俗部には犯罪が行われる話が多いが、治安が悪く荒れた世相をふくめて共通した雰囲気があり、短編「羅生門」と「藪の中」にもその同じ感覚が生きている¹⁾。

芥川の「羅生門」は下人の行方は誰も知らないという結末で終わっており、短篇「藪の中」も、殺人事件の真相がわからないまま幕が下ろされる。ともに下人について、あるいは事件の真相について、「誰も知らない」という闇の存在が余韻として響くのである。

日本では真相がわからなくなること「藪の中」という。それはこの芥川の「藪の中」をもとにして作られた定型表現である。中国語文化圏では、映画「羅生門」が広く知られており、それが犯罪の真相がわからず混乱するさまを描いているため、よくわからない状況を「羅生門」という表現で呼んでいる。日本人には驚かれるが、中国語文化圏では「藪の中」という表現は、ほとんど意味も持たない。それには理由がある。

中国語では「藪」という漢字は池とか沼という意味で用いられる。中国語使用者は、藪の中と言われても、池か湿地のことだろうと考

える。⁽²⁾

確かに「竹藪中」と言う翻訳タイトルも存在しているが、それは原作「藪の中」の藪という字を無理やり押し込んで強引に作られた表現である。竹の生えた池の中という印象で、意味が分らない。

普通に流通している翻訳タイトルは「竹林中」である。「竹林」は日本人にとっても、中国語圏の人間にも親しい言葉である。竹はアジアに広く分布しているからである。「藪」という漢字は、意味を曖昧にするばかりである。しかし、日本語では、この「藪」という漢字のニュアンスがとても重要であると感じられる。

「竹林の中」といえば、何の曖昧なところもない。清々しい印象すらある。しかし「藪」という言葉では、無秩序に木が茂っており、視界が悪く乱雑に荒れているだろうということまではわかるが、そこにある木の種類はわからない。「藪」という漢字そのものが、日本では曖昧なベールに包まれているのである。この言葉の感覚には、やや不快で不安な曖昧さが込められている。「藪」の意味が異なるので、「藪から棒」「藪蛇」という表現は中国語には存在しない。日本という「藪医者」(技術が劣っていて当てにならない医者)という言葉は、中国語では「庸医」(技術低劣靠不住的医生)という表現になる。「庸」は「凡庸」の「庸」で、つまらないという意味である。もちろん「藪」という表現は用いない。「湖の医者」では、意味不明である。

「藪の中」の中国語翻訳のタイトルは「竹林中」が最も普通で、

これは台湾などの繁体字文化圏においても、中国簡体字文化圏においても同じである。⁽³⁾

いずれにしても翻訳のタイトルには、必ず「竹」という木の種類の指定が入っている点に注目したい。何かわからない植物群の「藪」ではなく、「竹」という指定が入ると、曖昧さは消えてしまう。

したがって「藪の中」の中国語翻訳のタイトルには、何の木かわからない怪しい藪というニュアンスが存在しない。しかし、この事実とは、逆に芥川がこのタイトルに込めようとした意図を照らし出す可能性もある。「やぶ」という音は「やみ」にも通じる。それは「闇」である。しかしそのような音感も、翻訳においては伝えることができない。アジアには竹があり、それは共通の感覚として伝わるので、かえって問題を複雑にしている。タイトルの問題を見るだけでも、翻訳による作品受容のむずかしさがわかるが、このような考察を深めていくと、アジアの異文化から逆照射されることによって浮かび上がる形で執筆時の芥川の考えが見えてくる。本論考はそのような比較文化的視座から、作品「藪の中」のいくつかの側面を明らかにする試みである。⁽⁴⁾ 作者が原典に付け加えた要素は丁寧に検討されなければならないが、今までその原則がなおざりにされてきたのではないだろうか。そしてその新しい要素が、中国語翻訳においてタイトルに姿を現しているという現象が示唆するものは大きい。

二

ここでは「藪の中」との関連で、台湾における「羅生門」という言葉がどのようなニュアンスを含んでいるのかをまず整理しておきたい。状況はかなり複雑である。先述したように、まず映画「羅生門」(1950)の影響が大きい。この映画は、監督が黒澤明、出演が三船敏郎、京マチ子、森雅之、志村喬などである。舞台は平安時代であるが、羅生門は半分倒壊しており、世情も荒れ放題という世の中として設定されている。物語は、ある男の変死事件をめぐる、目撃者などがそれぞれ矛盾した証言をする。誰が犯人なのか、真実がどこにあるのか、混乱が生じる。芥川の短編「藪の中」の物語を基礎にして、語りの舞台としては雨の降る羅生門が採用され、タイトルも「羅生門」とされた。この映画は、日本映画として初めてヴェネツィア国際映画祭金獅子賞とアカデミー賞名誉賞(現在の外国語映画賞)を受賞した。そのほか全米映画評論委員会賞、ニューヨーク映画批評家協会賞、英国アカデミー賞をはじめ、海外で数々の榮譽に輝き、初めて世界に日本映画の存在を知らしめた作品である。⁽⁵⁾

真相がわからないという困難な状態について、例えば坂東賢治「東シナ海の「羅生門」」という新聞記事に次のような記述がある。⁽⁶⁾

日本語の「藪(やぶ)の中」とはほぼ同じ意味の中国語に「羅生門」がある。当事者の言い分が違い、真相がはつきりしない

という意味だ。芥川龍之介の「藪の中」を原作にした黒沢明監督の映画「羅生門」が由来でもととは日本語だ。

原作の内容から派生した言葉とはいえ、日本では小説、中国では映画の名前が同じ意味で使われているのは不思議な気がする。最近で言えば、中露の軍艦が尖閣諸島の接続水域に入った問題がさながら「羅生門」状態だ。

「羅生門」という言葉が特殊な意味で用いられることは、このように新聞記事でも紹介されている現象である。また例えば、荒井智・杜岱玲「〈研究ノート〉台湾にある日本語」には、次のような説明がある。⁽⁷⁾

羅生門 (luo2 sheng1 men2) : 映画「羅生門」の内容から意味を転用し、事件の真相は関係者の証言が乱れて分からない状態になっているという意味に使われる。

同論文は、これを比喩・隠語の使用例であると分類しており、その同様な例として、次の表現を挙げている。

紅不讓 (hong2 bu4 rang4) : 本来は野球用語「ホームラン」の当て字だった。テレビ番組名に使われてから「大人気である」という意味に使われるようになった。

要するに、真相が不明であるという意味の「羅生門」は、原典や原作などを気にせず用いられており、例えば「ホームラン」という言葉のように、外来語のような形で定着しているという。日本でも「ホームラン」はすでに日常語として定着し、比喩的な使用例も多

い。付言しておく、台湾では野球が盛んでプロリーグが人気である。その状況は日本に似ている。現在日本の巨人軍で活躍している陽岱鋼（ヤン・ダイガン）は、台湾プロリーグのスター選手であった。中国でも多くの日系企業がスポンサーとなつてプロ野球が始まった。しかし国民の関心は薄く、ルールもよく知られていない。

したがって「ホームラン」という言葉は、「羅生門」のように中国大陸では流通していない。このように、外来語一つをとつても簡体字文化圏と繁体字文化圏の間にひずみが存在するのである。⁽⁸⁾

また、正確を期するためにもう一つ付け加えておけば、繁体字文化圏である香港では、野球は中国より知られているが、台湾ほどではない。土地が狭く野球の練習場が確保しにくいので、普及しにくい。現地リーグでプレーする日本人によれば、次のような状況であるという。⁽⁹⁾

日本のアニメなどを通じて、野球というスポーツがあることを知っている人は多いですが、野球をやっているというと「え、香港でやっている人がいるの!？」という反応が一番多いですね。あとはソフトボールと区別がついてない人とか。ソフトは野球より狭いグラウンドでできることもあって野球より遥かに普及しています。各大学に複数チームあったり。

話を「羅生門」に戻そう。香港に住む友人に聞いたところ、やはり「羅生門」という言葉は、真相がわからないという意味で用いられるという。中国でも台湾でもそうなので、当然であろう。もう一

つだけ例を挙げておく。これは台湾在住の日本人のブログからの引用である。⁽¹⁰⁾

台湾でも芥川龍之介の「羅生門」は名高い小説で、今では、慣用句にもなっているようです。例えば…「這件事情變成了羅生門」直訳すると、「この件は羅生門となりました。」ですが、この「羅生門」は「結論がない」答えがない」という意味となり、「這件事情變成了羅生門」の日本語は、「この件については、結論が見いだせなくなりました」となります。

このブログでは、小説と映画の差が全く理解されていない。いずれにしても、日本語で言う「藪の中」という意味で、中国語圏では「羅生門」という言葉が広く用いられている。「ホームラン」などの言葉は流通に制限があるのに、「羅生門」という言葉は、繁体字と簡体字の垣根を越えて、広範囲に受け入れられている。そこには映画の影響と、長い年月に渡る影響の蓄積という要因が考えられるが、もう一つの原因は、この言葉がアジア漢字圏のみならず、西洋社会でも一般に流通しているからである。

ここで、ジェイ・ルービンの証言を見ておこう。彼は芥川龍之介の短編集を編集するにあたって、次のように述べている。⁽¹¹⁾

英語圏では文学に通じた者たちは——黒澤明の『羅生門』（一九五〇年）を観たことのない人々でも——真実は藪の中という状況を“Rashomon”という外来英語を使って言い表わす。「ニュー Yorker」誌の一九九三年四月十二日号に掲載された、

ロズ・チャストという才気ある漫画家の〈西八四丁目のラシヨモン〉という漫画には、車一台分の駐車スペースをめぐる議論についてのさまざまな場面が描かれている。この「ラシヨモン」という言葉があの映画に出てくる門の名前だと知って使っている英米人は少ないだろう。いくつかの視点から語られる入り組んだ話が短篇「羅生門」ではなく「藪の中」に由来することについても同様である。そして、映画のクレジットに原作者としての芥川という名前が挙がっていることに気づくことも思い出すこともほとんどないといつていい。そのため、今回の短篇集の題名には絶対に“Rashōmon”を含めようとペンギン社は決めていた。

つまり、すでに人々は黒澤明の映画も知らず、芥川の短編「羅生門」も「藪の中」も読むこともなく、Rashōmon という外来英語を駆使している。その言葉が通常の語彙として定着している。その状況は中国語圏でも同じなのである。

このような現象は、実は「羅生門」に登場する「蟋蟀」という虫がコオロギなのかキリギリスなのか、あいまいなまま読者に享受されている現実とも一致する。コオロギとキリギリスの混同は、もとの作品テキストに由来しており、それはまず日本語において生じている問題である。蟋蟀という漢字の意味をどう考えるかという蟋蟀論は、芥川以前から日本文化の中に存在している。しかし、それは文化的な問題として、同様に中国語圏でも生じている問題であ

る。そして同時に、西洋の国々でもコオロギとキリギリスの混同として生じている問題である。同じような意味で「羅生門」と「藪の中」の混同も、世界的な視野において考えるべき問題なのである。⁽¹²⁾

以上の現象からもわかるとおり、中国語圏で芥川の短編「羅生門」はそのまま「羅生門」というタイトルで翻訳されている。映画の「羅生門」も同じである。ただし簡体字の表記では、「芥川龍之介「羅生門」となる。

ところが短篇「藪の中」はといえば、先述したように、たいてい「竹林中」という訳になっている。これは簡体字でも繁体字でも、同じである。日本人から見ると、「竹の林の中」という意味になるが、すぐに理解できる文字である。先にも触れている通り、「竹林」では日本で用いられる「藪」という漢字が持つ整理のついていない陰翳のようなものが消えてしまう。⁽¹³⁾

竹というと、基本的に日本では縁起の良いものと考えられている。正月の門松の中心にあるものは竹であり、地方によって形は違うが、外国人の目から見ると、見事な斜めの切口が印象的である。これは台湾では飾らない。門松には、松竹梅の意匠があらわれることも多い。松竹梅はもともとは中国の「歳寒三友」が伝わったものだが、慶事・吉祥のシンボルとされる。ただし後に詳述するミリオンバンブーは、台湾に多い寺廟でも、祭壇に飾る代表的な植物となっており、門松のように本尊を挟んで左右対称に置くことが多い。念のために関渡宮や奇岩の媽祖廟、龍山寺など、台北のあちこちの寺廟で

確認してきた。

「藪の中」というタイトルに芥川が「竹」という言葉を入れたかったのは、縁起の良い竹、あるいは清々しくすっきりした竹を強調すると、物語の恐ろしさや暗さが半減してしまうと考えたからであろうか。また芥川が「藪」という言葉を用いたのは、「藪」という画数の多い漢字の持つ陰翳や、まがまがしさのようなものを感じとったからであろうか。もちろん原典となった『今昔物語集』の話には、生きている竹や竹藪は登場しない。

もう少しだけ、英語における翻訳の問題を考えてみよう。例えば『Short Stories of Ryunosuke Akutagawa』という本がある。芥川の短編の英訳を集めたものである。作品「藪の中」のタイトルは『In the Woods』となっている。林の中で、という意味であり、「藪」のニュアンスは消えている。「竹林中」に近い翻訳である。ただし、「竹」という言葉もなく、シンプルな林ないし森という形になっている。ここから、闇の感覚やまがまがしさ、ミステリヤスな雰囲気は消えている。最初の章は「検非違使に問はれたる木樵りの物語」だが、この章題は『The Woodcutter's Story』と訳されている。意味的には一貫している。ただし、このWoodcutter(木樵り)は杉を切るのであり、竹を切るわけではない。木樵りが藪の中に死体を見つげるところから、事件は始まるのだが、その英訳文を見よう。

Yes, I am the one who found the body. This morning, as

always, I went out to cut some wood. That is when I found the body in the woods at the foot of the hill.

このように木樵りは「木を伐りに行きました」と言っており、竹とは言っていない。そして「藪」は woods と訳されている。明快な表現である。つまり、タイトルから「竹」という言葉を消せば、まがまがしが生じるかというところではないのである。こうした「林の中」という表現では、やはり芥川がタイトルに託していた翳りは消えている。日本語を理解せず、外国の文化に生活する読者の視点で考えると、芥川の意図は、むしろ Rashōmon というあいまいな言葉の方に生きており、それはわけのわからない翳りのニュアンスとしてあらわれてくるといえるだろう。

なお中国語における「林」という言葉の感覚は、日本におけるものとそう変わらないと思われるが、適用範囲は広い。台湾の例であるが、台湾大学のキャンパスのメインストリートは、有名な大王椰子の並木道であり、そこが台湾大学の象徴となっている。これを「椰林大道」(イエリンダーダウ)と呼ぶ。一本ずつ並んでいる並木や街路樹を日本では林と呼ばない。しかし台湾では、並木でも「林」である。そしてこの例から、「林」という言葉に、悪いイメージが付随していないこともわかる。「林」は台湾でも中国でも最も多い名字の一つである。

三

これから「竹」の比較文化的な考察を深めることが必要になってくるが、その準備として、まず色彩に関する比較研究をしておきたい。竹の場合、その特徴として常緑という色の問題が浮上するからである。

異文化理解においては、いうまでもなく難しい問題が多いのだが、色彩のイメージもその一つである。例えば中国語文化圏では、赤い色はお祝いの色である。ご祝儀袋はすべて赤い封筒である。先ほど挙げた「ホームラン」を指す「紅不讓」という言葉にも、わざわざ紅い色が強調されている。ちなみに白は葬儀の色であり、伝統的な葬式では白い衣装を着る⁽¹⁵⁾。

祝儀に関して、もし白い封筒でお祝いを渡したら葬式の香典と間違われる。新年の慶賀や、廟の祭壇も、みな赤を基調とする。媽祖廟の提灯やランタンはもちろん、蠟燭もすべて赤い。伝統的な結婚式では、新婦も新郎も真っ赤な衣装を着ることがある。披露宴会場も全体が赤く染められることが多い。昔の中国の映画を見ると、新婦の輿入れの場合、もちろん真っ赤な衣装に包まれているのだが、その輿も赤く、輿を担ぐ行列の人々も全員赤い衣装を着ており、赤一色である。しかし、赤色が常におめでたいと言いきれない。台湾の例だが、個人で赤い服を着るというと、それは不吉な意味を持ちうる。誰かを恨んで自殺する人間は、真っ赤な衣装に身を包んで

いることがある。赤は恨みの色でもあり、要するに強い情念を表現するときに用いられる。これは日本とかなり異なるイメージである。

このように色の理解に関しては、比較文化的な視点から慎重に考える必要がある。そうした前提において、「藪の中」における色の問題を考えてみよう。旅法師の証言によれば、真砂の衣装について、「見えたのは唯萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます」となっている。萩の花の色は単純に定めることが難しいが、ムラサキセンダイハギ（紫千代萩）という名前に紫とあるように、まず紫色として考えておいてよいであろう。もちろん「萩重ね」は、紫と薄紫を表地と裏地に配した色目である。萩は秋の季語であり、日本では、その色は秋という季節感にむすびついている。

日本の古典の世界では「紫」は愛される色である。『枕草子』は「めでたきもの」として、「すべて何も何も、紫なるものは、めでたくこそあれ。花も糸も紙も」と断じる。『万葉集』においては、こんなやりとりがある。額田王は大海人皇子と結婚し一女をもうけたが、別れた。そして天智天皇（大海人皇子の兄）の妻となった。宴席で額田王は、大海人皇子が自分にまだ未練があるのだろうかという歌を詠んだ。「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」である。この歌に対して、大海人皇子は「紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも」と返した。もちろんあなたを思っているという歌であるが、その宴席には天智天皇もいた。こう

した夫婦ともう一人の男という三角関係の構図には、「紫野」「紫草の」と繰りかえされる紫色のイメージがある。また、『源氏物語』で光源氏の「永遠の女性」となるのは藤壺であるが、その姪（紫のゆかり）として、源氏の最愛の女性となる紫の上などの名も思い起こされる。やはり、源氏の女性関係の原点にある藤壺をめぐる構図が、天皇夫妻ともう一人の男（源氏）、しかもその男は夫の血縁者であるという三角関係となっている。こうして考えると、「藪の中」の女である真砂が「紫の女」であることには意味があるといえよう。古代中国では紫は最高の色であり、皇帝の衣は「紫衣」と呼ばれた。紫いろを尊ぶ伝統は、明・清朝の宮殿である「紫禁城」という名を見ると理解できる。簡体字中国語の辞書には、「紅得發紫」赤から紫に変化する、人気絶頂である」という表現が載っている。これは台湾でも同様で、繁体字で表記すると「紅得發紫」となり、この文字なら日本人でも読めるであろう。「大紅大紫」という同様の表現もある。台湾の読者が無意識的に真砂の衣装の色から受けるイメージは、どちらかといえば良いイメージとなる。しかし、萩もたらず秋という季節感はその存在しない。台湾では冬でも冷房が入ることがあり、通常の家には暖房はない。秋といってもいつが秋なのか分からないといえる。台湾にある萩はタイワンハギ（台湾萩）とされるが、日本に移植されたものは三〇六月、九〇十一月のころに蝶形の花を咲かせる。私は台湾で見かけたことはなく、花期は確認できなかったが、おそらくほぼ一年中咲いているのではない

か。いずれにしても秋の季節感はない。

真砂の夫は「縹の水干」を着ていた。水干は平安・鎌倉時代に、庶民の平常着であった。露草は別名縹草と呼ばれる。つまり縹色とは露草の色を表した色で、花色、月草色、露草色、千草色ともいう。縹色は薄い藍色で、藍染めとしては、この色を重ねて深い藍色を生み出す。かさねの色目の「搗き草」は表が縹、裏が薄縹であり、着用時期は秋である。

ところで多襄丸は「紺の水干を着た男」である。つまり武弘とおなじ庶民の服を着ており、青色の色であるがその色が濃い。中国語で青は簡体字で「藍色」、繁体字で「藍色」といい、紺は「深藍色」「深藍色」と表現する。紺は青の延長と考えていいであろう。はかない縹色に比べ、暗く強い色である。これは、「羅生門」における下人が「紺の襖」を着ていたという点にもつながりがある。つまり下人も紺色の狩衣の類を着ていたのであり、その下人のなれの果てが多襄丸であるのかもしれない。いずれにしても武弘、下人多襄丸がおなじ延長線上に乗っていると考えることができるであろう。¹⁶⁾

日本では、萩も露草も秋を表しており、萩はたおやかであるが芯の強いイメージ、露草ははかない露のイメージであり、真砂とその夫をよく表していると言えるだろう。しかしこうした季節感や植物のイメージは、台湾では通用しない。

はなだ色は青色だが、中国語における「青」は、まず五行思想に

おける「春」や「樹木」のイメージがある。「青春」という表現にそれは現れている。「青年」も同じである。なお、この「青春」という言葉で明らかのように、古代では、青と緑が区別されていない。日本でも青葉、青草、青竹、青蜜柑、青林檎、青蛙、青物野菜というのはいずれも緑のことである。日本では信号機の「青は進め」「赤は止まれ」と教える。中国語で青信号は「青」とは呼ばれず、簡体字で「绿灯」、繁体字でも「綠燈」（リユータン）である。

ここで緑色の意味について考えておきたい。基本的に緑はよい色として扱われているが、例外がある。中国や台湾の帽子屋さんには、緑の帽子は売られていないといわれる。この点については多くの報告が寄せられているが、一例として中国語専門学校の「中国ゼミ」の記事を引用しておこう。⁽¹⁷⁾

「緑色」自体はクリーンで元気な、良いイメージです。が、ただひとつ注意があります！ 男性に「緑色の帽子」を贈るのは厳禁です。中国では葬儀で遺族の男性が帽子をかぶることから、帽子自体がプレゼントとしては敬遠されています。特に「緑色の帽子」は「妻に浮気された男性」を指しますので、プレゼントには向いていません。

古代において緑色は良くない色でした。漢の時代には身分の低い人は強制的に緑の頭巾を被らされ、その後の唐代でも犯罪者は緑の帽子や頭巾を被らされていたそうです。その後、この「緑の帽子」はなぜか「妻に浮気される情けない夫」という意

味に発展します。

ある夫婦がいて、夫は商売のため頻繁に家を不在にしていた。妻は浮気相手の布屋に緑の布で帽子を作らせ、夫に「とっても似合いますよ」と言ってプレゼント。夫は喜んで毎回外出の際に緑の帽子をかぶったが、浮気相手の布屋にとっては夫が外出するサインだった。というのが由来で、確かに中国市場で緑の帽子を売っているのを見たことはありません。非常に侮辱の意味合いが強いので、シャレでも緑の帽子を男性にプレゼントしないよう嚴重注意です。

もし「妻に浮気される情けない夫」という点を強調するのであれば、竹の緑色はそうした暗喩を含むことになる。武弘は同情を誘う状況に置かれるし、ある意味で妻に浮気された男である。武弘という名にも「たけ」の音が響いているが、これは翻訳では表現できない。しかし「藪の中」の翻訳タイトルに「竹」を強調することは、そうした暗喩の効果を生むという側面があるだろう。また武弘は、「都風のさび烏帽子をかぶった儘、仰向けに倒れて居りました」という。さびえばしとは皺烏帽子のことであり、しわをつけ、黒漆を塗って固めた烏帽子である。日本と同様に、中国、台湾でも黒には「闇」「悪い」「腹黒い」などの意味がある。「黒市」（ヘイシー）は闇市、「黒心」（ヘイシン）は悪心、腹黒さをさす。武弘が、この黒い帽子を死んでも脱がなかったことは、奇妙な感覚を呼び起こす。作品は「おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまった」とい

う武弘の言葉で閉じる。武弘は闇と結びついた存在である。⁽¹⁸⁾

台湾でも葬儀で白い帽子のようなものをかぶったり、白い頭巾、あるいは白い布を頭に巻くような恰好で、棺桶を担ぐ風習がある。この帽子と、緑の帽子・黒い帽子は、いずれも死のイメージや負のイメージで結ばれている。その絆を導き出す色が竹の緑色であるということができるであろう。

芥川作品「河童」では、「生命の樹」に金と緑の実がなる。「あの金の果を『善の果』と云ひ、あの緑の果を『悪の果』と云ひます」とあるように、緑には悪のイメージが与えられている。

四

前章で緑色のマイナスのイメージについて触れてきたが、まず基本的に、木々が常緑であることは繁栄につながり、愛でられる対象となっており、それは日本でも同じである。さまざまな矛盾や複合性を持ったイメージとして竹が存在することを、繰り返し確認しておかなければならない。

中国に関する多くの文献をまとめたサイト「中国吉祥図案辞典」に、竹のイメージが簡潔にまとめられている。⁽¹⁹⁾

古代人は竹について「剛もせず柔もせず、草でもなく木でもない」と、竹の多面性をたたえて吉祥とした。また、竹は松梅と共に、「歳寒三友」と言われ、冬でも枯れぬめでたい植物と

されている。竹は火にくべると音を立てる事から、爆竹の起源にもなった。もちろん、その燃える音は魔を払う為の音である。また、竹はそのすがすがしさから、文人墨客に愛された。「竹林の七賢」「竹溪六逸」などの言葉は、竹と文人たちの深いかわりを感じさせる。

右のまとめで、基本的な竹のイメージの説明はほぼ尽きているといえよう。その前提の上で、現代の台湾の人間が、竹をめぐって具体的にどのようなイメージを持っているのか、いくつか例を挙げておきたい。

南投県竹山鎮は、竹の産地として有名である。竹山鎮の旧称「林圯埔」は林圯が開墾した功績により命名されたものだが、日本統治時代、この地方が良い竹を産することに因んで「竹山」(たけやま)と改称された。それが竹山鎮の名となっている。

台北の郊外にあたる新北市林口区菁湖里竹林路325号に「竹林山観音寺」がある。巨大な寺であり、地元住民の宗教の中心となっている。廟の向かいには約二万坪の敷地を持つ江南様式の庭園「竹林山寺公園」がある。竹林というイメージが聖性を持ちうる言葉であることがわかる。しかしもともとここに竹林があったかどうかはわからない。竹林山観音寺は日本統治時代に、日本政府の意向により建設された日本式寺院「竹林山寺」がもとになっており、新北市の蘆竹郷の「竹」、林口郷の「林」、龜山郷の「山」から一文字ずつ取り命名されている。

蘆竹郷というのは、もともとアシとタケが多い茂る土地であったといわれる。日本統治時代に行政地区改変が行われ、新竹州桃園郡蘆竹庄となった。一九四五年に中華民国により台湾が領有されるとこの地区は翌年蘆竹郷と改められ桃園県の管轄となった。この蘆竹郷のように、地名に「竹」を持つ場所が多い。

ここからまさに現代の話になるが、台北市立動物園にはパンダがいる。ここのパンダ舎には竹のデザインや置物があふれ、竹のイメージに満ちている。もちろんパンダは竹を食べている。パンダは多くの人々に愛されている。例えばラジオ台湾のサイトの記事に次のような文章がある。⁽²⁰⁾

人間の歯に銀冠をかぶせることは珍しくありませんが、なんと台湾には世界で初めて銀歯をいれるジャイアントパンダがいます。それは台北市立動物園の人気アイドル・团团です。

团团は9日、犬歯が破損したと発見されました。大好きな竹をこれからも食べられるよう、医療チームはまず一部感染された歯髓を取り除きました。23日には20人も動員して、团团に麻酔をかけ、チタン製の金属冠を歯に装着しました。

動物園の広報担当の曹先紹さんによりますと、麻酔から目が覚めると、团团はすぐ正常を取り戻しました。

手術の翌日、团团は屋外で竹の葉を頬張っていました。食欲が減退せず、きらきらとした銀歯を見せながら、おいしそうに食べています。そのかわいらしい様子に、大人も子どもも思わ

ず、「かわいい!」と。

この記事に台湾における竹のイメージの一端が垣間見えるであろう。また、サイト「TAIPEI IN A V」の記事には台湾における多くの竹の写真が紹介され、次のような内容の文章が掲載されている。⁽²¹⁾

台湾には現在およそ80種の竹があり、植生面積は約15万ヘクタールにのぼる。南投県は全台湾で最大の竹生産量を誇っており、台湾における竹産業の嚆矢は南投県竹山鎮とされる。長靴の形をした竹山には、豊かな竹林が点在し、一年中緑に覆われている。竹の美しさを愛するには竹山を訪れるのが最良の選択であろう。(中略)

かつて「竹は台湾人が天から授かった宝物」と言われた。台湾の生活発展史を紐解けば、衣食住に欠かせぬものとなり、独特の産業文化を形成してきたのである。台湾の竹産業は清朝時代に興り、今では豊かな竹工芸が営まれている。竹編み細工、竹彫りをはじめ、竹材を利用した工芸技術の発達は目を瞠るほどのものだ。(中略)

日本統治時代には、政府によって竹加工産業が奨励され、台湾における生育環境が優れていたこともあり、竹加工産業は台湾経済に大きな貢献を果たし、同時に台湾の竹産業の基礎が築かれたのである。以降、今日まで経済の発展や生活形態の変化に連れて台湾の竹製品も一般の日常品から文化産業と結合した

商品へと変貌を遂げつつある。現在でも日々、新たな商品企画、デザインされ、生活スタイルが多様化するに連れ、竹の新たな魅力も生み出されてきている。

この記事に、台湾に住む人々と竹のつながりが鮮明に描き出されている。もう一つだけ、日常的な例を挙げておこう。ミリオンバンブーという観葉植物がある。花言葉は、「幸福」「開運」「長寿」である。台湾では市場やスーパーなどで簡単に手に入る。日本でも「富貴竹」「開運竹」「萬年竹」「幸福竹」「招福竹」などと呼ばれているが、同じである。見た目はまさに竹であるが、厳密に言えばドラセナ系の観葉植物である。しかし、おめでたい縁起物の竹として、中国や台湾では、昔から神棚の装飾などに用いられている。開運や財運を象徴するものとして店などにもよく置かれている。水栽培でどんどん大きくなり、生命力も強いので、「發財」（ファーツアイ、財産増大）のイメージにピッタリである。台湾人にとって最も身近な竹であろう。

台湾の文化や習俗が、昔から非常に縁起を担ぐ習慣を持っている点に関しては、否定する者はいない。台湾人は、なるべく生活に縁起物を取り入れようとする。例えば台北101（イーリンイー）という極めて現代的なタワーがある。これは、二〇〇四年に建てられた地上101階からなる超高層ビルで、台北を象徴する建築物となっており、観光地となっている。このタワーは地震対策や高速エレベーターなど、現代科学の粋を駆使して出来上がったものである

が、それ以前にかなり縁起を担いで設計されている。風水で場所を選び、吉祥を求める意匠を施してある。台北のどこからでも見えるが、その姿は節のある竹である。

台北の人間にとっては自明の話であるので、特に引用を求めるほどのこともないが、例えばリクルートのサイト「エイビード」⁽²³⁾には、このようなわかりやすい説明がなされている。

台北101は、「財」「富」などの意味をこめた、中国風水と吉祥の観念がこめられています。まずは風水で良いと判断された建築場所が先に決まりました。建物はまるで竹のように見え、全部で節が8つあり、1つの節に8階分があります。これは「8」が中国で縁起のよい数字で、発音が「発」に似ていることから富裕を意味するところからきています。「竹」も一節ごとに力強く成長し、しなやかでめでたいイメージがあり、竹の中の空洞は慎みと謙虚さを現しているそうです。また、節の角や建物内の様々な場所で見られる「龍頭」や両端から中央に向けて巻いていき中央で二つの渦巻きがつながった形、一見すると雲のような装飾は「如意」と言って中国の吉祥を意味するものです。

台北101タワーの竹のイメージは、これでほぼ明らかであると思われるが、また、サイト「PHOTRAVEL」⁽²³⁾には、次のような記述もある。

輪郭は宝塔と竹の節がイメージされ、タワー部の27階から90

階までは、8階ごとに逆台形をした一つの節が8つ連なり、縦に建立されている。逆さの「八（はち）」に見えるようになってるのは、台湾圏と香港圏では縁起の良い数字とされ、随所に使われています。

つまり、台北101は台北の「富貴竹」として建設されたのである。これまで、やや象徴的な視点から竹をとり上げてきた。それでは台北に住む者にとって、実際に生きている竹と現実にとどのような出会いがありうるであろうか。その一例を示そう。

地下鉄淡水線北投駅から支線が分かれた先に「新北投」駅がある。この駅前から、すぐ北投公園に入ることができる。手すりがあるところ竹の意匠になっている。北投温泉発祥の地といわれる天狗庵跡の記念広場にも、竹が植えられている。しかしこれらは植栽である。

北投公園に沿って川が流れている。この川に沿って坂を上ると、公営の露店温泉を過ぎたところで、竹の一群がある。竹がぎっしりと生えていて隙間もない。竹林でもなく竹藪でもなく、竹の一群、竹むらである。もともとは誰かが植えたのであろうが、ある意味で自然な竹と出会うことができる。川に大きく張り出して揺れており、竹藪かとも思わせるが、根本の土の面積はわずかである。さらに坂を登ると、橋を過ぎたところに同じような竹むらがある。さらに登ると、美代ホテルがあり、その隣の水都ホテルの横に、やはり同じような竹の茂みがある。川に沿う石垣の間の小さな面積に大変な数

の竹が生えており、川に覆いかぶさっている。その近くにある道をたどり、地熱谷に入って、湖のむこうの斜面を見上げると、いくつかの竹むらが認められる。谷を出て、さらに進んで登っていくと、「郷林玉川」の建物の前（玄関前）に低い竹の植え込みがある。しかしこれは植栽である。以上は、台北在住の人間が簡単に竹に出会えるという一例である。

桃園空港から台北に向かう地下鉄線から、山々がよく見えるが、林のところどころに竹むらが認められる。また地下鉄で台北駅から淡水方面に向かって北上すると、「圓山」あたりから東側に山が見えてくる。その山の斜面に、いくつも竹むらが見いだせる。台北で出会う竹むらは、ほとんどが荒れ放題のぎっしりつまった竹の塊である。こうした森や林の中に点在する荒れた竹むらは、根を伸ばして拡張しないように地中に遮蔽物が埋め込まれているのかもしれない。2019年の夏に汗だくになりながら調査をしたが、竹林とか竹藪と呼べる規模のものを台北で探すことは難しかった。しかし竹が身近に存在していることは確認できたのである。アジアに住む一員として、現代の台湾の読者にも竹が理解できることが分かった。もちろん現在でも、竹はアジアを象徴する植物である。

しかし、例えば台北に生活する人間が、いつも竹というものを意識して暮らしているとはいいたい。私もはつきり竹を見分けることができるまで、かなりの努力を要した。いずれにしても「竹林中」というタイトルから、台湾人読者は、曖昧ながら緑色の世界を

感じ取ることであろう。そこに異国情緒はないであろう。しかし「竹林中」には原題の「藪の中」というニュアンスを嗅ぎ取ることなく、その藪の中の暗さが武弘の落ちていく闇の中と呼応する感覚が伝わるという可能性は、考えにくいといえるであろう。⁽²⁵⁾

これまで長々と述べてきた台湾における竹文化の諸相は、芥川の子息を讀むうえで直接の關係がないように考える向きもあるであろう。しかし、繁体字文化圏には、まず繁体字というものがその象徴となつてゐるうちに、芥川が愛した中国の文化の良き伝統、古き良き感覚が保存されてゐるのである。芥川が讀んでいた漢字、用いていた漢字が繁体字である。台湾の竹に関する考え方の中には、現代日本における場合よりも、芥川の感覚にかなり近い部分が散見されるのではあるまいか。

五

多くの辞典を参照してもほぼ同じことが書いてあるのだが、サイト「一行佛學辭典搜尋」の「竹林」の項目にある記述を引用する。

1. 竹叢遍布的林子。

2. 竹林七賢中的阮籍、阮咸為叔姪，後敬稱人叔姪為「竹林」。台湾でいう「竹林」とはつまり、竹が群がつて広がっている林である。二つ目の意味は竹林の七賢にまつわるものである。それは、中国の三国時代、三世紀ごろ、竹林に集まって酒を飲んだり、樂器

を奏でて交友したり、超俗的な清談をおこなった人々である。「竹林の七賢」と称されるが、全員が一堂に会したことはない。俗世を逃れるイメージが強いが、権力闘争の続く世の中で、奇行や酒を隠れ蓑にして、危機を回避していた賢人たちである。ここに俗塵を避ける場所としての竹林というイメージが成立する。日本では、近世の障屏画の主題となるなど、馴染みの深い話である。竹林には、日本の「藪」という言葉が持つている暗さや視界の悪さ、どこか混乱したようなあいまいさは、逆のベクトルを持つすがすがしいイメージがある。

「竹藪」という表現は台湾には存在しないといつてよいが、日本では竹林とは異なり、手入れも管理もされず荒れたままの竹林を「竹藪」と呼ぶことが通常であるらしい。⁽²⁶⁾

また、竹に虎が取り合わせとして登場することがある。中国では虎は竹林に住むとされている。虎の勇猛さや高潔さが竹によつて強調されるのである。法隆寺にある玉虫厨子に描かれた「捨身飼虎図」では、虎が竹林の中にいる。「竹に虎」は縁起の良い取り合わせとされている。

これも一例であるが、謡曲に「龍虎」という曲がある。龍虎に関する中国の故事や繪画などをもとにした能である。仏跡を求めて中国に渡った僧が木こりの老人と男に出会い、龍虎の戦いのことを聞く。僧の目の前で、雲を起す龍と風を生む虎の激しい戦いが繰り広げられる。ここでは竹林が主な舞台となる。黒雲が竹林を覆い、

洞穴に籠もっていた虎（後シテ）が現れ、強い風を吹き出して龍の起こした雲を吹き返す。この後シテは竹林の作り物から現れる。芥川は能が好きであった。「藪の中」に虎は登場しないが、木こりが現れて語り、旅の僧が現れて語る。竹も登場する。このような語りが行われるところは、芥川が能を参考に行っている可能性がある。

「藪」という言葉の意味としては、すでに詳しく触れているが、「一行佛學辭典搜尋」ではまず「密生雜草の湖澤、沼澤。」となっている。「木樵」に関しては、

1、木柴。如…「薪樵」。《左傳・桓公十二年》…「輕則寡謀，請無扞采樵者以誘之。」宋・柳永《煮海歌》…「滷濃鹽淡未得

聞，採樵深入無窮山。」

2、打柴的人。

このように記されている。まず「木樵」とは木の柴のことであり、柴を打つ人もいう。柴とは、「供燃燒用的小木枯枝」のことであり、すなわち燃料として燃やすための小木や枯れ枝のことである。小説の中では、この木樵りの証言はこうなっている。

わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。（中略）竹の中に痩せ杉の交つた、人氣のない所でございます。（中略）草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、余程手痛い働きでも致したのに違ひございせん。

燃料用の小さな枝である柴を集めるのは柴刈りであり、木樵りが木を切り倒すのは少し違う話である。「桃太郎」などの昔話では「おじいさんは山へ柴刈りにいきました」というほぼ定型といつてもよい表現があるが、おじいさんは木樵りではないので斧は持たない。木樵りはいつも杉の木を切っていると述べているので、斧が必要である。竹を切る場合は、現在では竹専門に作られた「竹引き鋸」を用いるというが、さもなくばナタ（鉋）などを用いると思われる。

斧は用いない。『日本国語大辞典』（第二版、第十三巻、小学館、2002・1）では、「木樵り」とは、「山林の木を切ること。またそれを職業とする人。」とある。日本では柴を集める人は「柴刈り」であり、木樵りとは区別される。たぎぎに適した雑木の小枝を探すことが柴刈りである。炊事などの焚きつけ用の燃料として必要なのである。木を燃やした灰は作物の肥料として用いられる。

最も問題をはらむ文字が「藪」であるが、これまでも触れてきたとおり、日本では密生して見通しがきかない林を指す。「藪から棒」には「寝耳に水」という類似表現もある。「藪をつついて蛇を出す」、「藪から蛇」という表現もあり、これは「余計なことをして災難を招く」意味で、「藪蛇」と省略される。いずれにしても、これらの「藪」という語感に、良いイメージはない。「藪の中」というタイトルに芥川が「藪」という言葉を用いたのは、そういう「藪」の持つ陰鬱のようなものを感じとったからであり、縁起の良い竹を強調しようとする意図はないであろう。⁽²⁷⁾

さて、作中では竹と並んで大きな役割を果たすのが杉の木である。しかし、杉といわれても、一般の台湾人には、聞いたことはあるものの、どんな木なのかはつきりわからないのではないだろうか。台湾には杉そのものがあまりない。例えば、銀杏の木が台湾でめずらしいのと同じである。台湾大学キャンパスに一本だけある銀杏の木を指して、黄葉時に台湾各地から撮影に来るという。黄葉や紅葉というものが台湾では珍しいのである。同じように、杉は珍しい。杉がないので、台湾ではスギ花粉による花粉症の症状が出ないという報告をよく聞く。日本の旅行会社が、花粉症を逃れられる旅行として台湾旅行の効能をうたっている例も多い。日本にいる時はひどい花粉症の人が、台湾では春になっても症状がでない。その春という時期がいつであるのかも曖昧であるが、杉の木がほとんどないのである。しかし存在しないわけではない。何種類かの杉があり、花粉症の原因となる杉は「柳杉」という。これは1906年に初めて日本から台湾に植樹されたという⁽²⁸⁾。

杉も竹も、通常は紅葉や美しい花の季節などはないので（咲かないわけではない）、一見して季節感の豊かな植物ではない。いわゆる常緑の植物である。作品の中の表現で、季節にかかわるのは、蠅が一匹だけ死体に来ているという木こりの証言である。本当に真夏であればもっとたくさんの蠅がたかるはずである。季節は秋に入っているであろう。手綱が切れたか、外れてほじめてしまい、多襄丸は落馬し、馬は長く伸びた手綱を引き摺りながら青芒を食べてい

たという。青芒とは、まだ芒が白い穂になる前の、初秋の情景であると考えられる。

この馬の大きさは「四寸」であるという。馬の背丈は、脚の先から肩までの高さをはかり、基準値の四尺（約120センチ）に足した端数で表現するので、月毛の馬は「四寸」（約12センチ）を足して、約132センチとなる。僧侶というものはお経を暗記するなど、もともと知性や記憶力が高いので、作品でも証言者として採用されたと考えられるが、一瞬で馬を132センチの高さと見抜いて記憶したこの法師の観察眼と記憶力は大変なものということになる。さて、この法師の証言であるが、旅の若い夫婦の様子に関して、次のような表現がある。

見えたのはただ萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確か法師髪（29）の馬のやうでございました。丈でございますか？丈は四寸もございましたか？

この部分の、繁体字翻訳の一例を見てみよう。⁽²⁹⁾

我只看見她身上那件外紅裡青，好像是秋季衣裳的顏色。馬是桃花馬……好像是鬚毛被剃掉的和尚馬。您說馬有多高？大概有四尺四寸高吧？

この訳文を、もう一度日本語に訳すと大体次のような感じになる。私に見えたのはただ、彼女が体にまとったものが外側が赤く内側が青いことで、これは秋の衣装の色目のようでした。馬は桃花馬です……たてがみを剃られた、僧のような馬だったと思

います。馬の高さとおっしゃいますか。だいたい、四尺四寸と
いうところでしょうか。

まず、台湾では日本の尺貫法に相当する「尺斤法」を用いている
ので、尺や寸という長さは、たいていそのまま理解できるのである。
現代日本人には難しく、台湾人の感覚の方が芥川の尺寸を用いる感
覚に近いといえるであろう。

萩重ねは先にも触れたように、濃い紫と薄い紫という組み合わせ
である。それを赤と青の取り合わせとして訳していて、秋の色目で
あるということを説明している。赤と青という表現では、今まで述
べてきたような「赤」に関する文化的背景と、「青」に関する文化
的背景が対峙する構図が生まれてしまうであろう。またもしこれが
青いマントに赤い衣服ということであれば、キリスト教の聖母マリ
アが想起されてしまうであろう。付言すれば台湾の国旗である青天
白日滿地紅旗も、青・赤・白の三色で構成されて、それぞれの色に
シンボルとしての意味合いがある³⁰。

この訳文で一番問題になるのが「桃花馬」である。極めて充実し
たインターネット上の辞典「漢語網」では、「名馬。毛色白中有紅
點の馬。」と説明されている。毛が白くて赤い斑らが付いている馬
である。例えば千里を走る伝説の名馬のような意味であり、実在の
馬ではない。

唐詩などでもすでに歌われているが、桃花馬の乗り手としては、
王貴人（おうきじん）が有名である。王貴人は、中国明代の神怪小

説『封神演義』に登場する女性である。芥川は知っていた可能性が
高い。甲冑を身にまとい桃花馬に乗り、繡鸞刀（しゅうらんとう）
を振りまわして闘うが、結局斬首される。真砂が桃花馬に乗ってい
るということは、彼女は王貴人であるともいえ、つまり妖女である
か、かぐや姫のような存在であるか、いずれにしてもほとんど超自
然的な女性であるということになる。女仙であると考えても良い。
また「法師髪」の意味を剃髪したと考え、鬢が剃られている馬とい
うイメージとなっているが、これも神秘性を増幅させるであろう。
確かに、『日本国語大辞典』によると、法師髪は語義未詳とされ、「馬
のたてがみをそったものか」という説明があり、「真鹿毛なる馬の
法師髪にて」という用例が『今昔物語集』から引用されている。芥
川も、『今昔物語集』から学んだ言葉であろう。しかし一般的に桃
母馬は、鬢を剃られている馬ではない。そもそも剃るというような
行為が馬に対して行われるのかどうか、確信が持てない。おそらく
毛を刈り込んでいるというところであろう。

こうした繁体字翻訳は、馬の月毛や法師髪というイメージを重く
受け止めて、それをやや拡張しすぎた解釈の結果であろう。しかし
それは逆に、芥川の意図を如実に照射している可能性もあるのであ
る。

六

ここでは具体的に、いくつかの繁体字の翻訳書から、翻訳文を用いて検討してみよう。まず先ほども引いた、インターネットに流布しているテキスト（「網路資源」）である。なお引用文の句読点は、すべて日本式に近いように統一してある。

被檢察官盤問的樵夫的敘述

發現那具死屍的，確實是我。我今天早上和平常一樣，到後山砍杉。那具死屍，正是在後山的叢林中發現的。您是說有死屍的地點嗎？那大概離山科（京都市東山區）街道有四五百公尺吧。那裡除了有竹林和瘦細的杉樹外，什麼都沒有。

死屍身穿淡藍色的高官絲綢便服，頭戴京式烏紗帽，仰躺在地。雖說身上只挨了一刀，但那刀卻深深刺穿胸膛，所以死屍四周的竹子落葉，血紅得就像染透了蘇枋似的。不，我發現時，血已經停止了。傷口好像也已乾了。而且死屍上有一隻馬蠅，好像聽不見我的腳步聲似的，拼命在忙著啃咬死屍。

有沒有看見佩刀或什麼嗎？沒有，什麼都沒有。只是死屍旁邊一株杉樹根部上，有一條繩子。還有……對對，除了繩子之外，還有一把梳子。死屍四周，就只有這兩樣東西。不過，草地上和落葉上，有一大片被踐踏的痕跡，那一定是那個男人在被殺之前，有過相當激烈的抵抗。什麼？您說有沒有馬嗎？那裡根本就是個馬匹不能進去的地方。因為那裡與馬匹可以通行的道路，之間隔

著一道竹林。

このうち、最初の段落を日本語に訳してみよう。

檢察官が質問した木こりの証言

死体を見つけたのは確かに私でした。私は今朝いつも通り、杉を切るために山に行きました。死体は裏山の林の中で発見されました。死体のある場所について話せというのですか？それはおそらく、山科（京都市東山区）から街道を400、500メートル行ったところでしょう。竹林と細い杉の木の間には、何もありません。

「竹」という言葉は、藪という形ではでてこない。竹林と杉である。犯罪の場所は曖昧であるが、林のあるところだということになる。次に、葉笛訳、芥川龍之介『羅生門』（水牛出版社、初版1986・4、再版三刷1990・11）所収「竹藪中」より引用する。

被檢查官盤問的樵夫的口供

是的。發現那具死屍的，確實是我。我今天早上和平常一樣地，去山後砍杉。而在山陰的竹篁裡，有那具死屍。您是說有屍體的地點嗎？從山科的驛路可能隔著四五町吧。就是竹林中參雜著瘦而細的杉樹的、那個荒無人跡的地方。

死屍著淡藍色的絹獵衣，戴著京式烏紗帽，仰天倒臥在那邊。雖說只有那麼一刀，但是因為胸膛的戮傷，死屍周遭竹子的落葉，就像染透了蘇枋似的。不，血已經不再流啦。傷口彷彿也是乾的。

並且那裏還有一隻馬蠅，連我的腳步聲也聽不見似的，緊釘在那邊。

有沒有看見佩刀或什麼嗎？不，什麼也沒有的。只有在那旁邊的杉樹根，扔著一條繩子。還有——對對，除了繩子還有一把梳子。在死駭四周的，只有這兩件東西。但，草和竹子的落葉卻有一大片被踐踏著，一定是那男人被殺之前，做了很厲害的掙扎。什麼，您說還有什麼馬嗎？那裏根本是個馬就不能進入的地方。因為馬的道路是隔著一道竹簾的。

先の翻訳と同様に、このうちの最初の段落を日本語に訳してみよう。

檢察官に問い詰められた木こりの告白

はい。死体を見つけたのは確かに私です。今朝はいつものように山の裏に行き、杉を切りました。山陰にある竹むらの中に、死体がありました。死体のある場所でございますか？それは山科の大通りから四、五町程度のところにあります。竹林の中で、痩せ細った杉の木が混ざり合った、人里離れた場所です。こちらの訳では、竹林の中に杉が生えているという趣である。杉と竹が混ざり合っているという感覚である。情景としては、少し想像しにくいですが、その辺りが原文でも曖昧であるために、判断に困るところである。

次に芥川龍之介著『世界文學經典名著 羅生門』（新潮社文化事業有限公司，修訂一版2018・12）所収の「竹林中」から引用する。

これも翻訳者は誰か不明である。このうちの最初の段落を日本語に訳しておく。

《被檢査官盤問的樵夫的口供》

是的。發現那具屍體的，就是我。我今天早上和平常一樣，到了山後那邊砍柴。就在山陰的竹林中，看到那具死屍。——您說屍體的地點嗎？是從山村的驛路，可能隔著四、五町（一町約109公尺）那麼遠吧。就是竹林中，參雜瘦瘦細細的杉樹的，那個荒無人跡的地方。

死屍穿淡藍色的獵衣，戴著京式烏紗帽，仰天倒臥在那邊。周遭竹子的落葉，就像染透了蘇枋似的。不，血已經不再流啦。傷口好像也是乾的。上面停一隻馬蠅，連我的腳步聲也不理，緊緊叮著那邊。

有沒有看見佩刀或什麼嗎？沒，什麼也沒有。只有在旁邊的杉樹枝，以及一條繩子。

還有？——對對，除了繩子還有一把梳子。嗯？對，在屍體四周的，只有這兩樣東西。沒有別的了。不過，草和竹子的落葉卻有一大片被踐踏過的樣子，一定是那個男人被殺以前，做了很激烈地掙扎。——什麼？您說還有什麼馬嗎？那裏根本就不可能會有馬進去。——為什麼？因為馬路是隔著一道竹林的啊！

檢察官に問い詰められた木こりの告白

はい。あの死体を見つけたのは、私です。私は今朝いつものように、木を切るために山の後ろに行きました。山陰の竹

林で、死体を見つけました。死体のある場所でございますか？それは山の村の大通りからつづく道で、四、五町（一町は、約一〇九メートル）ほど遠ざかったところだと思います。それは竹林の中であり、痩せ細った杉の木と混ざり合っており、人里離れた場所です。

これもほかの翻訳とほぼ同じである。竹の林の中で、竹と杉が混ざって生えているところが、死体の発見現場ということになっている。

次に黄瀬瑤訳、『文豪書齋104 芥川龍之介 羅生門』（野人文化股份有限公司、2015・11、二版2016・10）所収の「竹林中」より引用する。最初の段落の日本語訳も付する。

検非違使盤問樵夫所獲得の證詞

是的。發現那具屍體的就是我沒錯。今天早晨，我一如往常來到後山砍伐杉樹。結果便發現那具屍體躺在山腳暗處的竹林裡。發現他的地方嗎？那裡跟山科的驛路隔著四五町的距離。那片竹林中夾雜著細瘦的杉樹，是個人跡罕至的地方。

屍體身穿淡藍色的水干，頭上戴著京都式的烏紗摺帽，仰躺在地。雖然他身上只中了一刀，但刀子正好刺在胸口上，因此屍體周遭的竹子落葉就像浸了蘇芳染料般一片通紅。不，我發現時已不見出血。傷口似乎早已凝固。好像只有一隻馬蠅緊緊黏附在傷口上，牠似乎連我的腳步聲都沒聽見。

我是否有看到長刀或其他武器？沒有，什麼也沒有。只有一根

繩子掉落在旁邊的山樹根上。還有——對了、對了，除了繩子之外，還有一把梳子。屍體周遭只有這兩項東西。但草和竹子落葉都被踩得亂七八糟，因此那男人遭人殺害之前，一定會拚命地搏鬥過。什麼，有沒有馬？那是馬進不去的地方。馬能走的路跟那裡隔著一片竹林。

検非違使が木こりを問い詰めて得られた証言

はい。死体を発見したのは私であることに間違いはありません。今朝、いつものように、私は杉の木を切り倒すために裏山にやって来ました。その結果、山麓の暗いところにある竹林に横たわる死体を発見したのです。彼を発見した場所でございますか？それは山科の大通りから四、五町ほど遠ざかったところです。あの竹林の中は、痩せ細った杉の木が混ざり合っており、人里離れた場所です。

この翻訳でも、竹林の中に杉が生えているということになっている。次に彭春陽訳、『芥川龍之介短篇選粹・輯一 小説』（木馬文化事業股份有限公司、2016・9）所収の「竹林中」より引用し、最初の段落の日本語訳を付す。

判官訊問樵夫得的供詞・・

大人說的沒錯。發現那屍體的人就是小的。今天早上，小的一如往常前往山裡砍伐杉木。就在山後竹林中，發現那具屍體。確切地點嗎？那是從山科大道過來，相隔約一里的地方。竹林裡還有幾棵小杉樹，是很少人去的地方。

屍體穿著淺藍色外衣，頭戴京城流行的軟烏帽，仰躺倒在那裡。雖說是一刀斃命，但因為是穿胸的傷口，所以屍體四周竹子落葉都染上了紫紅色。不，已經沒有流血了。傷口好像是乾的。而且那裡還有一隻馬蠅，似乎聽不到小的腳步聲，緊緊黏在那裡。

大人問的是有沒有看到長刀？沒有，什麼都沒有。只有旁邊杉樹根附近，一條繩子掉落在那裡。然後——對了對了，繩子之外還有一把梳子，屍體周邊有的東西，就只有這兩樣。只不過雜草和竹葉被踩得亂七八糟，所以這男的被殺之前，一定經過激烈打鬥。什麼？有沒有馬？那裡基本上是馬兒進不了的地方。隔著竹林另一邊才是馬走的道路。

檢察官に訊問されて木こりが答えた言葉

あなたさまの言う通りです。死体を見つけたものは小生でございます。今朝、いつものように私は山に行きました。杉の木を切るのです。山の後ろの竹林の中で、あの死体が見つかりました。正確な場所ですか？それは山科の大通りから来て、一キロほど離れたところです。また、竹林の中には何本かの小さな杉の木があります。そこは人里から離れた場所です。

この翻訳もほかの翻訳と大同小異で、竹林があり、その中に杉の木が生えている場所ということになっている。要するに、どの翻訳においても、犯罪が行われた場所は竹林の中であり、そこに何本か杉の木が生えている。つまり事件は竹林の中で起こったという翻訳になっている。タイトルで多く採用されている「竹林中」という表

現と一致しており、読者が矛盾を感じることはない。おそらく初期の誰かの翻訳を参考にして訳しており、それが踏襲されてきた可能性はある。ただ繰り返し指摘してきたように、原文の「藪の中」という木の種類を指定しない、抽象性をはらむ曖昧なタイトルの力は失われてしまっており、「竹林中」という表現が「真実がわからない」という定型表現となるような形で受容される可能性は、考えにくいのである。

七

張嘉真は、多襄丸が紳士的であろうとしており、それを女性が裏切ったという構図を指摘している⁽³¹⁾。

多襄丸は女性が二夫に見えずという貞操観から発言したように、と言っているが、むしろ、自分の生活の不快を取り除く為に、他人の生命を奪う事を辞さない、これは女性の本能である。これが彼によれば、女性の本性である。然しながら、彼は綺麗な愛を期待する為に、結局、女性は信用出来る人間だと考えてしまった。更に、この態度で彼はその女性を縛っておかないで、男と戦った。そして、彼と男とが闘いに気を取られている間に、女性の姿はいつの間にか消えてしまった。この事実は彼に女性に対する強い不信任感を湧かせた。更に、彼の「白状」した内容を通してみれば、女性に対する不信任感を認められる。

「私は単なる盗賊なのではない。というのは、普通盗賊は犯罪者、暴力などで女性を入手すると思われているだろうか。然しながら、私は女性をまともに愛し、女性に敬意を払う男だから、盗賊だというだけではないのである。一言で言えば、私は盗賊だという事よりも、紳士なのである」これが多襄丸の心理的な作用描写と言っても、過言ではないだろうと推測する。このように多襄丸の心理の流れを指摘しているが、同様な指摘はほかにも多い。例えば藤原紀子は、次のように考えている。⁽³²⁾

多襄丸は、色欲のみにとらわれている際は、騙し討ちという手立てを取っていた。しかし、真砂に対し、「妻にしたい」という欲求が生まれてくると、それまでの態度と一変し「卑怯」な行為を恥じるようになっていくと考えられるのである。

しかし多襄丸は、真砂に最終的には騙されてしまい、いつてみれば手玉に取られている。その後の、検非違使の調べに対する証言においても、みなが矛盾することを申し立てている。検非違使は男であるが、もしその検非違使が巫女（よりまし）まで使って死者を召喚したとすると、それほど証言が混乱していたからだと考えられる。真砂に手玉に取られた男たちが混乱したことを述べたので、検非違使も混乱し始めたと考ええると、ある意味では、検非違使も真砂によつて手玉に取られているのである。あるいは、真砂のほかに、真砂の母親や巫女という女たちにも手玉に取られているという可能性がある。それぞれの者たちの言葉が竹のようにどんどん勝手に育つ

ていくので、收拾がなくなっていく。読者はそのような、つまりいわば女たちの力が竹の林のように繁茂する状況を目の当たりにするのではないか。⁽³³⁾

寫田明子は「それぞれが各々の物語の登場人物である」と指摘し、「それぞれの語りきれぬ思いを補完するように殺人（自殺）という行為」がなされており、「藪の中」は「自己の心情を他者に語ろうとして語りえず、伝えようとして伝えきれぬところに表出してしまふ言葉と行為の在り様」を示す点を指摘している。⁽³⁴⁾

このように、ある意味で、それぞれの言葉と言葉の間に断絶や齟齬、違和感が生じているということは、早くから指摘が繰り返されてきている。それはある意味で、杉と竹が親和するはずもないのに、混在しているような違和感である。竹の林は普通の森林とは異なる感覚をもたらす存在である。基本的には相いれないのである。そうして違和感は、それぞれの人物たちの言説の孤立感というものを想起させる。

例えば大場恒明は、次のように述べている。⁽³⁵⁾

《事実》は、この作品の中では、決してうめられることのない《空隙》として、武弘の死骸にべったり張りついている馬蠅のように、たえず現存している。芥川の精緻な描写、あるいは、三人の当事者の饒舌な陳述は、この《空隙》をうめるためにはなく、ますますその存在を顕すためにおこなわれる。

あるいは奥野政元は、次のように述べている。⁽³⁶⁾

三人がそれぞれに己れに真実になればなるほど、この空間の空白性が際立ってくる。この空白を前にすれば、霊的真実は霊的真実以上でも以下でもないものであり、ただそこには、永久に結合されない肉的事実と霊的真実との間隔のみがたち現れるのである。

日本人研究者は、「藪の中」を読むとき、竹という存在にほとんど注意を払うことがない。しかし、そこに展開する言説の間に、どうしようもない空隙や空虚、事実との間に横たわる距離のようなものが横たわっていることには鋭敏に気付いている。こうした空隙というものを、密集しながらも内部がからである竹が象徴しているとみることもできるのではないだろうか。芥川がなぜ作中に執拗に竹を描いたのか、少なくとも、繁体字翻訳から逆照射されて浮かび上がる「藪の中」の問題が、ここに一つ明らかになってくるのではないだろうか。⁽³⁷⁾

(注)

(1) 映画「羅生門」、および小説「羅生門」に関しては、黄郁婷「芥川龍之介「羅生門」の受容について——「繁体字文化圏」からの照射——」(『青山学院大学文学部紀要』、2018・3)で触れている。「繁体字文化圏」という概念についても、この論文を参照。

(2)

諸橋轍次『大漢和辞典』(巻九、大修館書店、1988・1、修訂版第八刷)には、「藪」の字について「大澤。ぬま。湖。」水が少なく草木が茂つて鳥獣のすむさは」という意味が始めに並ぶ。これは中国語における伝統的な漢字の意味であり、日本における用法では、沼や湖の意味は消えてしまっている。落合直文『ことばの泉』(大倉書店、1902・4、訂正第十七版)によると、「藪」はまず「草木の乱雑に生ひ茂れるところ」とあり、「特にたかやぶの略。」とある。「たかやぶ」を引くと、「竹藪。」と書かれている。新村出『広辞苑』(岩波書店、1978・9、第二版増訂版第二刷)でも、「藪」はまず「雑草・雑木などの密生している所。」とあり、沢や湖という意味は記されていない。そのほかの多くの辞書も同じである。例えば『日本国語大辞典』でも「草木・竹などが手入れもされず乱雑に生い茂っている所、おどろ。」とあり、湖等の意味は記されていない。

(3)

「繁体字文化圏」とは、簡体字を用いる中国に対して、繁体字を使用する台湾を中心に、香港を加えて考えている。簡体字文化と繁体字文化の間には断絶があり、台湾で出版された書物はそのまま香港で流通しているが、中国の書店には並んでいない。

(4)

なお、台湾の「國家圖書館」のサイトで検索しても、「藪の中」(『竹林中』)を単独で論じた論文は見つからない。「臺灣博碩士

論文知識加値系統」という検索エンジンで、張嘉真「芥川龍之介的虚像與實像—【地獄變】、【竹藪中】、【河童】、【或阿呆の一生】—を中心」（中國文化大學日本研究所、2003）が見つかる程度である。中国ではもう少し多くの論考が提出されており、例えば最近では、徐峰「《竹林中》的叙述者及叙事——探求芥川龙之介《竹林中》的主题」（《安徽文学》ANHUIWENXUE、2018・7）や、吴以诺「日本文学鑑賞之价值观分析——以芥川龙之介《竹林中》为例」（《教育教学论坛》EDUCATION TEACHING FORUM、2018・10）などが見つかる。秋吉收「台湾における芥川龍之介受容の諸相」（《言語文化論究》九州大学大学院言語文化研究院、2016・10）に、「現在の台湾で、芥川の翻訳・紹介書や研究書が数多く出版されると書いたが、一つ注意したいのは、それはほぼすべてが、日本文学としての芥川の特質や評価を述べたものであり、『台湾』の文脈の下、台湾と関連づけて芥川（文学）を取り上げ、分析したものはほとんど存在しないことである。誤解を恐れずに言うならば、台湾における芥川研究のすべては、日本における芥川の解説を基本的にそのまま襲ったものである」という指摘がある。「藪の中」に関する限り、それを首肯するしかない状況であろう。なお明智周「竹林内の羅生門…男人與女人的東洋式對決」（明智工作室、2012・1）は、映画「羅生門」を論じたものだが、芥川作品にも言及がある。

- (5) 制作会社の大映は、「羅生門」が出来上がると、企画者を誅首し、総務部長を左遷し、海外からの出品招請を拒絶した。黒澤はイタリフィルム社長のジュリアーナ・ストラミジョーリが自費で映画祭に出品したことも知らなかった。「日本映画を一番軽蔑したのは日本人だった。その日本映画を外国に出してくれたのは外国人だった。これは反省する必要はないか。」と黒沢は語っている（都築政昭『黒澤明 全作品と全生涯』東京書籍、2010・3、一八六頁参照）。なお、ポスターのキャッチコピーは「むせかえる真夏の草いきれの中で繰り展げられる盗賊と美女とその夫の、息詰るような愛慾絵巻！」となっており、季節が真夏と設定されていることがわかる。映画の多襄丸は半裸で、始終蚊に刺されており、手で蚊を叩いている。
- (6) 坂東賢治「東シナ海の「羅生門」」（『毎日新聞』2016・6・16、東京朝刊）
- (7) 荒井智、杜岱玲「〈研究ノート〉台湾にある日本語」（『明海日本語』明海大学、第18号増刊、2016・11）
- (8) 阿佐智「中国野球はどこに行ったのか2…プロスポーツとして定着したサッカーを覗いて思う」（サイト「Yahoo Japan ニュース」2018・4・19、7時00分更新）によると、「中国野球リーグは、（中略）いまだチケット販売をし、来場者から収入を得るというプロリーグとしての基本点にすら立っていない」という。中国側の報道でも、「中国では野球はかなりマイナーなス

ボーツで、ルールも知らないという人が大半を占めている」(『BIGLOBE ニュース』2019・3・10、11時30分更新、Record China) とする。Wikipedia の「中国野球リーグ」の解説でも、「野球のルールを知らない観客のために試合中に今のプレーはどうかということなのかという実況が会場内に放送される」と書かれている。

- (9) 「香港の野球事情を現地の人に伺いました」(@sekainoyakyu) によるブログ「世界の野球」2010・10・24更新の記事) 内の、「現地のリーグで2006年からプレーしている三好正記さんへのインタビュー」による。

- (10) meng によるブログ「家族と仕事と台湾人彼と、え」と(2011・12・13、21時56分更新、なお文章の改行を一部省略) より引用。この種類の報告は数多い。

- (11) ジェイ・ルービン(畔柳和代訳)「芥川龍之介と世界文学」(『芥川龍之介短篇集』新潮社、2007・6所収)

- (12) コオロギとキリギリスに関しては、前掲論文の黄郁婷「芥川龍之介「羅生門」の受容について——「繁体字文化圏」からの照射——」で詳しく論じている。

- (13) 先述のジェイ・ルービンによる短編集は『Rashomon and seventeen other stories』(Penguin classics, 2006, Ryunosuke Akutagawa ; selected and translated with notes by Jay Rubin ; with an introduction by Haruki Murakami) である

が、「藪の中」は「In a bamboo grove」と訳されている。ちなみにフランス語では「Dans le fourré」と訳されており、「茂みの中で」という意味になる。茂みは何の木かはわからない。竹であることを明確にするのなら「fourré de bambous」となる。

- (14) 『Short Stories of Ryunosuke Akutagawa 芥川龍之介短篇集』(IBCパブリッシング、2016・12)

- (15) 例えば中国の連続テレビドラマ『後宮の涙』(「陆贞传奇」2013)で、後の武帝帝高湛が、祖母が亡くなって弔間に行くと行って、喪服に着替えるシーンがある。普段は全身黒い衣装を着ていて、着替えると全身真っ白で華やかな衣装となっている。これは日本人には違和感を与える。高湛は葬儀よりも結婚式にいくように見えるであろう。現代では、もちろん西洋的なウェディングも増えているのだが、白色を葬式の色と見なす伝統的な考え方は中国でも台湾でも変わっていない。

- (16) 高月美樹「かさねの色コラム」(「暦生活」新日本カレンダー株式会社ホームページ)には次のような説明がある(更新日不明)。

友禅染めの下絵に使われている青花(あおばな)は、この露草の栽培品種です。染まりやすいけれど水に溶けて褪せやすいこと、早朝に咲いてしぼんでいく一日花であること、はかなく消えてゆく朝露のイメージなどが重なって、月草は露草と呼ばれるようになったようです(中略)。(標

色は) 藍染めとしては途中経過の色ですが、江戸時代の着物や布団の裏地として使われたのが、縹色程度に染められた木綿で、花色木綿と呼ばれていました。(中略) 花色というとピンクを想像するかもしれませんが、この青です。

- (17) フルーエント中国語学院サイト「中国ゼミ」の記事「発音付 中国語で「色」を表現するー基本の12色・日中で違う色のイメージ」(2017・7・22)。同様の指摘は、例えば中国語スクール「Lilian」ホームページ「中国コラム」中の記事「知っておくべき中国文化の色彩知識ー現代中国で使える色の意味」(2016・11・22更新)に見られる。このイメージは繁体字文化圏でも同じである。

- (18) 帽子に関して言えば、高野山の僧侶龍太郎(龍範)による中国滞在記サイト「入唐見聞録」第2話 日本と中国の死生観のちがい(2016・6・1)に次のような記述がある。

白い野球帽のような帽子をかぶった遺族たちが、ご遺体の御棺をかついで、町中を行進します。号泣している女性たちが御棺を囲っています。(中略) じつは彼女たちは「泣き女」と呼ばれる、雇われた一種のサクラであります。泣き女が多ければ多いほど、一族の面子が立ちます。遺族たちのかぶっている白い帽子は魔除けの意味があるそうです。

- (19) 「中国吉祥図案辞典ー中国のシンボルとイメージ」(中国雑

貨専門店燕京百貨ホームページ)

- (20) 「RTI台湾国際放送 (Radio Taiwan International)」ホームページ日本語版、2018・12・26更新の記事「世界初! パンダに銀歯」による。

- (21) 「台湾竹の美」(サイト「TAIPEINAVI」のスペシャル記事、2012・7・18)

- (22) リクルートの海外旅行サイト「エイビロード」の記事「風水と吉祥の観念が反映された台北のシンボル「台北101」」(2008・6・2更新、筆者あみんこ)

- (23) サイト「PHOTRAVEL」の「台北101「タイペイリーニイ」ー台湾で東アジアで一番高いビル」(2016・4・11更新)

- (24) 例えば、二〇一九年八月に日本の河野太郎外務大臣の竹製腕時計が話題になった。「河野大臣が的外れな「金時計」批判を軽くいなす」(サイト「テレビ朝日」ANNニュース、2019・8・23、20時20分更新)の記事では、インターネット上で、外務大臣の金時計に批判が出ていたことに對して、大臣は「この時計はフィリピンで行われたASEAN(東南アジア諸国連合)50周年の式典に参加した際に記念品として配られたもの」であるとツイートした。竹がアジアの一つのシンボルともなっていることを感じる。昔より、ヨーロッパから見た日本のイメージには、竹が関与する。サントリー公式ホームページ

ジ「バンブー レシビ」また「Bar UK Official HP & Blog（酒とピアノとエトセトラ）since 2004.11.」などから多くの情報を集めて確認したが、日本生まれの創作カクテル第一号として、現在も国際的によく知られた「バンブー」がある。ドライ・シェリー、ドライ・ベルモット、オレンジ・ビターズを組み合わせたもので、竹の味はしない。明治三年に横浜の外国人居留地に開業した「横浜グランドホテル」のBARで、支配人兼バーテンダーのルイス・エッピンガーが考案した。エッピンガーは、「竹のようにまっすぐで、クセがない」ところから、「日本＝竹」をイメージして、「バンブー」と名付けたという。

(25) 竹の調査にあたつては、台北で竹林が見つからず困っていたところ、台北の北投地区を熟知している日置俊次教授から多くの貴重な示唆をいただいた。また台北から地下鉄淡水線で北上し、北投を過ぎてしばらく行くと、「竹園」という駅がある。列車が駅に近づくと、竹園という名の通り、周りに竹藪がいくつも見えることを日置教授に教えていただき、現地を確認した。台北の市民は、手の届くところに竹があるといえるだろう。

(26) 例えば明治より続く老舗竹屋の四代目竹虎のブログ「竹虎四代目がゆく」の「竹林と竹藪の違い」（2014・1・23）の記事を参照。

(27) 『日本国語大辞典』などの多くの辞書のほかに、Webマガジン「TRANS.Biz」『つとむ』「藪から棒」の意味とは？由来や

使い方をわかりやすく解説」などを参照。「藪から棒」は、英語にすると定型表現の「out of the blue」になることが多い。これは青空から急に稲妻が走るという感覚であり、そこには「藪」というニュアンスは存在しない。

(28) 台湾のサイト「認識植物」の中の「柳杉」の項目を参照。また台湾における杉の種類などは「杉木、柳杉及台湾杉之紹介」の項目を見ると良くまとめられている。杉のことは普通は「杉樹」か「杉木」と言う。「杉林」はしばしば地名に使われている。高雄の杉林区などが代表的である。

(29) インターネットサイト「網路資源」の「芥川龍之介 文選」（2001・10・8更新）<http://teacher.whsh.tc.edu.tw/huanyin/mofa.jie2.htm>より翻訳文を引用した。タイトルは「竹林中」としてこのサイトに掲載されており、簡単に読むことができる。サイト運営者や作者は未詳である。インターネットで簡単に読めるので、この訳文の影響力はかなり大きいと推察される。

(30) 青天白日の青は空を、十二本の光芒からなる白日（白い太陽）は一年の十二月と十二支、十二宮、十二刻を表す。また、青は民権主義と自由、赤は民族主義と革命に身を捧げた人々の血と友愛、白は民生主義と平等を象徴している。

(31) 張嘉真「芥川龍之介的虚像與實像——【地獄變】、【竹藪中】、【河童】、【或阿呆的一生】為中心」（前掲論文）による。なお引用

した部分には、中村光夫の考えの影響が強いように思われる。

- (32) 藤原紀子「芥川龍之介「藪の中」論——真砂の役割とは」(『清心語文』ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会、2011・9)

- (33) 注の(36)で触れるが、日置俊次「芥川龍之介「藪の中」論」は、不思議な「女の力」というものの存在が作品のテーマであると考えており、それが竹のイメージとして表されていると指摘する。海老井英次「「藪の中」論の問題点と原典——〈中有〉の世界と自己劇化」(『芥川龍之介論攷——自己覚醒から解体へ』桜楓社、1988・2所収、引用は海老井英次編『芥川龍之介作品論集成第2巻 地獄変——歴史・王朝物の世界』翰林書房、1999・9、一八一頁より)は、「真砂の夫に対する殺意は常に確認される」として、「武弘の死に関して、誰が彼を殺したかを推理小説風に尋ねることはもはや無意味であろう。彼の死の因はまさしく妻真砂にあり、その点のみがこの作品の〈真相〉と言ってもよいものだからである」と述べている。作品の焦点が真砂にあるとすれば、そこには「女の力」という主題が浮上するだろう。真砂という女性の多層性やしたたかさに着目する論は多く、笠井秋生「「藪の中」(一) 三つの陳述の信憑性をめぐって」(『芥川龍之介研究』双文出版社、1993・5、一六五頁)は、「多襄丸に捨てられ、夫をも失った真砂が、今後、女として生きていくためには、そうした悪女の印象を払拭して、

貞操堅固な女であるとの同情を得る必要があった。かくて、彼女は自作自演の心中未遂事件を脚色したのである」と指摘する。また「藪の中」のテーマは、真砂という女性存在の残虐さ、恐ろしさを描き出し、それへの憎悪、怨念を表明することである」(酒井英行「藪の中」探索『芥川龍之介 作品の迷路』有精堂出版、1993・7、一〇一頁)という意見もある。佐々木雅發「藪の中」捜査——言葉の迷宮——(『芥川龍之介文学空間』翰林書房、2003・9、二九六頁)は真砂の妄想に触れて、「いわば彼女は、分裂病者の〈強迫行為〉にも似て、〈妄想〉において、夫の殺害と自己の自己性を無限反復的に確認しているといえようか」と述べている。吉田敬「芥川龍之介「藪の中」論——一人語りの虚構」(『近代文学試論』広島大学近代文学研究会、2008・12)は、「藪の中」前半の「検非違使に問はれたる嫗の物語」の証言による真砂は凡庸な女性であった。後半の怪しい妖艶さをもつ真砂との相違、多襄丸、武弘、真砂が語る武弘を殺害(自死を含む)したのが自分たちであるとする矛盾は、それぞれの物語の背後に、見立てという虚構世界を置いているためである」として、真砂の変容を指摘している。

- (34) 寫田明子「藪の中」論——語りえぬ思い・その跳躍」(『国文学解釈と鑑賞』2007・9)

- (35) 大場恒明「藪の中」の二重性——物語の構築と解体」(『日

本女子大学紀要（文学部）、1989・3）

（36）奥野政元『芥川龍之介論』（翰林書房、1993・9、241頁）

（37）本論考を執筆するにあたり、指導教員の日置俊次教授には、数多くのアドバイスを受け、原稿の日本語も細かくチェックしていただいた。特に二〇一九年六月には、すでに完成していた論文「芥川龍之介「藪の中」論——竹に隠された秘密——」（「青山学院大学文学部紀要」2020・3）を見せていただき、本論考の出発点となる示唆を得た。そこで本論文執筆を慫慂され、かさねの色目、能、フランス語などについても詳しくご教示いただき、心から感謝の意を記しておきたい。